

UA 神奈川学習センター

2000年1月1日
第3巻第1号(通巻9号)

ふゆ だより

ハイライト

- 1 新春の言葉
- 2 本をつくりました!
- 3 日々の行い
日々の考え
- 5 研修旅行の感想
- 7 学生団体・サークル
同窓会のお知らせ
- 8 放送大学学生募集



放送大学神奈川学習センター
〒232-0061 横浜市南区大岡 2-31-1
TEL:045-710-1910
FAX:045-710-1914
<http://www.dango.ne.jp/ua-kana/>

特集：

本をつくりました！

「卒論」が実を結び

金子 總子

夢がかなって私の本ができました。この本は、現在中国で活躍中の児童文学者で、詩人の尹世霖さんとその作品を紹介したものです。

1938年生まれの尹世霖さんは当年61歳。中国の現代史と共に歩んできました。本書にはこどものための朗誦詩を約50編選んで、日本語と中国語を上下二段に並べて掲載し、これらの詩の書かれた時代背景を解説してあります。この解説は平成6年度に提出した卒論を基にしたものです。卒論の題名は「詩人尹世霖の作品とその時代」（人間の探究専攻）で、紆余曲折のはげしい現代中国の人々のありのままの姿を探りたいと考え、中国現代史とそこに生活する人々の心を尹世霖さんの作品を通して理解しようとしたものです。そのなかの作品を一編紹介しましょう。

花と草

私が 好きなのは どの花？
私が 好きなのは 朝顔の花
暗い処へは 行かないで
光に向かって 這い昇る
朝早くから 咲きこぼれ
小さいラッパを ぶいているよ

私が 好きなのは どの草？
私が 好きなのは えのこ草
立派な公園に 行かなくても
どんな山 どんな野でも 生えている
青空に向かって 成長して
大風が吹いても 倒れないんだよ

この詩は1981年に書かれたもので、10年間にわたった文化大革命がようやく終わり、国中が近代化を目指して動き出した頃の作品です。国中が混乱し、疲弊している時期に書かれていることが、この詩の背景にある意味を深めていると思います。小さい子どものための4行の詩から歴史の一頁を切り取った124行もある叙事詩もあります。卒論を書きながら、これらの詩をもっと多くの人々に紹介したいと思っていました。

そのような願いから、平成10年9月に西新宿の「ギャラリー澤」で「尹世霖の童詩の世界展」を開催しました。多くの方々のお力添えをいただいて、

ささやかながらも有意義な催しとなりました。11月にはこの展示会の様子が、放送大学の「大学の窓」で「中国児童文学にひかれて」と題されて紹介されました。このことがこの本の出版に結びついたのかもしれませんが。この本の出版にあたり、序文は卒論のご指導を受けた浜口允子先生に寄せて頂きました。このような幸運により「東京文献センター」からこの本が誕生したのです。放送大学に入学して卒業研究に取り組んだことが私の人生に大きな実りとなりました、心からお礼を申し上げます。（『尹世霖・現代中国朗誦詩の世界』東京文献センター出版2,000円税共）

二冊目を翻訳して

高橋 昭子

前回の訳書ラスキン著『アミアンの聖書』に次いで、二冊目の共訳書ウォード著『カーライル・ラスキン・トルストイ』を出版した。この三人についての研究書である。「ラスキン」が私の卒業研究のテーマであった。けれども、今回はカーライルの章の翻訳に参加した。カーライルとラスキンは師弟ともいえる間柄で、卒論の頃からカーライルにも関心を持っていた。しかし、不勉強のゆえに彼とその著書についてはまったくの暗闇の中に置きざりにし、今回の翻訳という作業を通して漸く少しばかりそれらを明るみに導き出すことができた。彼の代表作として有名な『サター・リサータス（衣服哲学）』にまつわるエピソード、J.S.ミルとのアクシデント、家庭生活、アメリカのエマソンやドイツのゲーテとの交友なども知ることができた。翻訳の苦労は本ができあがったとき報われる。だが、商業ベースにのったとはいえ利益を得るには程遠い。この類の本は出す程に赤字が嵩む。前回の『アミアンの聖書』は新宿の「ぱる出版」がリスクを負ってくれた。今回もということは許されない。この翻訳グループはパソコンを駆使して版下を作り上げた。だが、それでも表紙、印刷、製本とプロの手にかかせることも多い。今回は原書には収録されていない珍しい写真も掲載できた。当初は出版社を設立することも考慮したのだが、それは断念し、再度「ぱる出版」の好意を受けることにした。

この本はコンパクトにできた分、非常に読みやすくなったと思う。ラスキン、カーライル、トルストイおよび彼らの著書について、その高潔な思想について、彼らの生い立ちについて、彼らの悩みについて、この一冊でかなり知ることが可能である。彼らの名声は高く、著書もあまりにも有名で世界的に高い評価を得ているにもかかわらず、その著書は現在多くの人に読まれているわけではない。もしこの中の誰か一人にでも、あるいはどの一冊にでも心の中に惹かれるものを持っていられる方には、是非この本をお手にとっていただきたい。お近くの図書館にリクエストも可能である。お買い上げくださるとしても、この本は安価だと思う。

訳者代表による解説も興味ぶかい。今世紀のはじめ（1901年）に書かれたこの本は、日本でもその直後（1903年）に住谷天来による漢文調の訳書が発行された。ラスキンの初めてのまとまった紹介となっている。今世紀の終りにこの新訳が出版されるのも何らかの因縁が存在するような気がする。21世紀への展望も定まらない今、20世紀への予言者の言葉が何らかの示唆を与えてくれるかも知れない。苦労を共にした共訳の方々、そして「ぱる出版」に感謝申し上げ、出版の喜びを分かち合いたいと思う。次回の共訳、三冊目はラスキン没後百年にあわせてZ・ハッサン著『ガンジーとラスキン』で、新しい視点から見たガンジーとラスキンが詳論される。（M・A・ウォード『カーライル・ラスキン・トルストイ』ぱる出版1,500円税別）
（なお、「ジョン・ラスキン：思索するまなざし - 御木本隆三旧蔵書を中心に」と題するラスキン没後百年展、ラスキン文庫、榎ミキモト共催が平成12年3月4日-14日、銀座ミキモト本店ホールで開催される。）

私の著書

皆川 昭三

都市、地方を問わず、交通戦争或いは交通地獄と言われて久しい。が一向に事故は減らず、日常の行動にも時間的ロスを招く事が多い。

渋滞の中でイライラしたり、先を急ぐあまりヒヤリと肝を冷やしたりする経験も相変わらずである。

そんな時、一気に連なる車列の上を飛び越えられたら気持ち良かるうに。この車社会に代わって空中を自由に飛び交って行けたら、もう新しい道路建設も不要で、地球の緑も回復してくるに違いない。そんな空想からストーリーが生まれた。

私の名前の語呂に合わせ、「伊奈川創造」という会社が、従業員の見事な協力でジェット空艇を創造し、予定の

コース往復を見事に成し遂げ、一躍日本の注視的となったという空想科学の話である。

筋書きのポイントは一人乗りのジェット空艇を発明する会社の苦心と、懸命な努力を続ける従業員の熱意を描いたところにある。積極果敢な創造力が業績不振に陥る会社を救い、遂に念願が達成された時の喜びが読者にも伝わるならば有り難い。念願のジェット空艇が世に出て交通手段の変革をもたらす、マイカーに代わる。自家用ミニ飛行機とも云えるこの乗り物が、交通渋滞をも一気に解決する小気味よい想像の世界が貴方の心を包んでくれることでしょうか。登場人物が、ひょっとしたら貴方かもしれません。侃々諤々の議論をする辺りは、或いは経験者も、そんな小説で胸躍る思いでペンを走らせます。この本は、国立国会図書館にも献本した。(『人が飛んでいく』創栄出版(株)1999年1,143円税別)

体験の数々を一冊の本に

當問 いく子

仕事をしながら子育てをする不安から、子どもの成長に合わせて保育園や学童保育の父母の会や、地域の子ども会、PTAなどに関わってきました。

孤独になりながらも、地域の父母と関わることで「子育て」を乗り越えられ、子どもを通して知り合えた多勢の父母の力の大きさを感じてきました。それらの源となる「大田の子ども会少年団」の活動記録や、子ども達の声をいっぱい収録し経験を綴りました。私たちの活動記録として残すことが出来ました。

この本『大田の子ども会少年団』は、B5版116頁で私たち少年少女組織を育てる大田センターの指導員と父母たちの協力で、四人の編集委員が情熱を傾けたものです。既に、多くの方々から好評を頂き同時に励ましの言葉も寄せられ、苦心の甲斐があった事を喜んでます。まさに記録は宝なり。(『大田の子ども会少年団-青空学校は友達をつくる学校だった』少年少女組織を育てる大田センター発行 1999年)

卵²

藤井輝

卵²とは「卵の卵」のつもりで表現しました。実は、私が小説を書き始めた動機を聞かれて、ちょっとたじろいだところです。それは「卵の卵」ゆえんで内緒にしていたからです。

6年ほど前になりますが、初めて書いた作品が、文藝春秋社「オール読物推理小説新人賞」の最終審査に残った

ことがあり、それに気を良くして書き続けています。しかし、最近は充電期間と称して読書に時間を割き(これも卵の勉強)、鳴かず飛ばずの期間が長くなりすぎて、この卵は、はたして孵化する見込みはあるのだろうか?と知る人ぞ心配してくれませう。

動機はといえば、最初の作品は小説の形態を執っておらず、企業における人間関係を書き綴ったことに端を発します。これも企業戦士と言われたちょっと若い頃の悩み事ですから、格好いいものではなく「あの野郎、ぶつ殺してやりたい!」なんて、物騒な話が推理小説に形を変えたわけです。決して過激な性分ではないつもりですが、内容は過激にしました。最終審査に残ったのは、それだけリアリティがあったということでしょうか。ちなみにその作品のタイトルは「怒りのベクトル」でした。

私は文学とは凡そ縁のない技術系で、専門は電子工学系自動制御です。30年ほど電機メーカーの研究所で、生産技術の研究・開発に携わってきましたが、人間関係は話題が豊富で、小説のネタの宝庫かも知れません。

今後は卵が化石にならないよう頑張りたいと思います。

日々の行い 日々の考え

私に不可能なことは無い マニュアルがあれば

松本 清康

自分のことは良く分からないが、他人の事は良く分かる。それでちょっとしたことも気になり、あの人は変わった人だなどと思いつく。他人の癖はすぐ気がつくのに、自分には癖など無いと言い張るのと同じである。自分の目で自分が見えず、自分の声で自分で聞こえないようなものである。自分の声は骨を伝わって直接耳に入るためテープレコーダーで聞いた声とは全く違う。人に厳しく自分に優しいという現象はこの様に自分自身の悪いところや癖が見えないためではないかと思う。

それで自分のことではなく西田幾太郎の研究などといって他人を研究することになるのだと思う。そして、研究が進めば西田幾太郎だったら、この様なきにどうするかなどということも

分かるようになるのではないか。つまり、西田幾太郎のシュミレーションができるようになる。西田幾太郎になりきる人も出てくるかもしれない。良くアイドルにあこがれていつの間にかそのアイドルになりきってしまうファンのように。

資生堂専務尾澤達也氏が、日経産業新聞1997年8月上旬の「美の科学32」で、「脳はハードウェアであり、個体の死とともに消え去る。ところがここは、いわばソフトウェアだが、どうも私には残るような気がする。この関係はコンピューターのハードウェアとソフトウェアの関係に似ている。ここはハードウェアである生体の一部である脳の中に生ずる。今、私たちは自分たちの脳の中に『ゲートのこころ』や『漱石のこころ』を再現することができる。こころというソフトウェアはずっと生き続けている。」と述べておられる。

西田の心というソフトを構築することが西田哲学を研究することだと思う。それは西田の考えた知識のリストではなく、この問題に西田はどう答えるかという考え方の枠組みが問題だと考える。

ところで、ファーストフードの店やコンビニエンスストアの店などはマニュアルがしっかりしていて、それを読めば素人でも経営ができるらしい。それがうまくいったので世界的に成功したのだ。そして、マニュアルはその企業のノウハウが詰まっているという。著作権などで保護されている。マニュアルさえしっかりしたものがあれば、子供でも飛行機が操縦できるということで、パイロットが急病で子供が女性が操縦して着陸するという映画があった。すべての場合について記述してある完全なマニュアルさえあれば、何でもできる。

けれども、良いマニュアルさえ与えられれば私に不可能なことはない、というのは嘘である!最近の家電製品や車など取扱説明書は製造物責任の関係で、やたらやっつけはいけないことが羅列してあって、なぜいけないのか、どこまで自由に取り扱い扱えるのか、見当がつかない。マニュアルの要領で書いてくれば、良く分かるのではとも思われる。しかし、パソコンの取り扱い説明書で経験したように、少しも昔と変わらなく、やはりマニュアルでは理解できないのではないか。

これは、いわゆるマニュアルというものが対応できるのが、生活常識を互いに知っていることを基礎としている場合に限られるからだと思う。コンビニなどのマニュアルは、挨拶などのような、人と人との関係や接し方と言っ

た生活常識に基づいた手順書ではないかと思う。

円が高くなれば株価が安くなるのは経済の常識だが、生活常識からは理解できない。電気の火花は生活常識では最短距離になる間で起こると思われるが、電気の常識では最短距離は関係ない。勤務先で地震等の災害時マニュアルを作れと言われたことがあったが、いろいろな場合が出てきて書ききれなくなってしまう。90%以上が当然のことなので、改めて書くほどのことではなかったのだ。しかし、電気屋には当然と思ったことも、土木屋や機械屋、事務屋には当然ではないものもあった。また、逆の場合もあった。想定できることはすべて書き出さないと、マニュアルとしては意味をなさないが、それは不可能である。つまり、非常時には想像もできないことが当然起こる。今までの経験の積み上げであるマニュアルでは、役に立たない。そのとき必要なのは、基本に戻ることである。電気の故障なら、その原理に立ち返り原因を追及する事だと思う。

「脳はハード、心はソフト」と言ったときのソフトは、いわゆる計算機のプログラムというただの手順(マニュアル)のことを言っているのではない。西田幾太郎の研究と同じで、これが西田幾太郎の考え方そのものであり、西田幾太郎のパラダイムなのだと思う。

災害時のマニュアルは各専門ごとのパラダイムが分かっていることを前提にして作るべきだと思う。そして、基本的な方針を明示し、一番起きそうな事例を例として適用方法を示すべきだと思う。専門が違ってもマニュアルも変えなければならない。つまり、誰にでも適用できる完全なマニュアルは絶対ありえない。すべての専門分野に通じていれば可能だが、そうしたらマニュアルの必要は無い。しかし、それでもマニュアルを欲しがらる。このマニュアル通りやったのだから、結果は良くなっても免責されると言う保証が欲しいのである。マニュアル通りやったのだから、問題が起きて私には責任は無いという免罪符を求めているのではないか。

世の中の進歩と複雑さの一つの専門でなく多くの専門分野の知識を必要としている。生涯教育はそれが目的で、放送大学もそのために作られたはずである。高校の教育では地学をやらなくなったとか数学も範囲が狭くなったと聞く。経験的な知識はどんどん増え、また社会の変化に伴ってその内容も変化してきた。必要なパラダイムは多方面にわたり、ますます生涯学習の必要性が増してきたと思うのであるが、マニュアルという免責を保証するおふだ

にすぎりつく輩も多いと思うこの頃である。コンピューター全盛のこの世の中で、中世の免罪符のような迷信のさばっている気がする。

CS放送と私

芝崎 芳和

放送大学の講義がCSを使って放送されてから、早くも一年半を過ぎました。

これまで関東地方に限られた放送が、衛星を用いることで、全国の受講生や教育機関などが直接受信できるようになったこの感激……などと、私が口はばったことを述べる立場には勿論ないのですが、私には少し違った感動と沢山の思い出があります。

もう20年以上の年月が経ちました。昭和52年(1977年)12月に、国の宇宙開発計画の一環として、実験用中容量静止衛星CSが打ち上げられ、「さくら」と命名されました。翌年の5月には定常運用に入り、本格的な通信実験が開始され、私の奉職していた電電公社もこの実験に参加したのです。

CS実験は、郵政省が主催し、宇宙開発事業団の協力によって、郵政省電波研究所と電電公社の横須賀電気通信研究所が主体となって実施することになりました。私はその頃、横須賀通信研究所に勤務を命ぜられ、野比にある衛星実験所に毎日のように通っていました。ここで「門前の小僧」的ではありましたが、多くの衛星通信技術を学びました。

静止人工衛星の原理、人工衛星の姿勢制御や位置制御、地上からの追尾の方法、衛星の電源にからむ静止衛星の食の話まで、それまで聞いたこともない話に目の廻るような思いでした。特に興味を引いたのは、CSは国内通信衛星であることから、よその国へは電波が飛ばないように、衛星のアンテナが日本列島に沿って放射特性を考慮され設計され、作られていることでした。

実験用CSには8台のトランスポンダが搭載され、2台はマイクロ波帯用で、6台が準ミリ波帯用でした。国内通信衛星に準ミリ波帯が用いられたのは世界で初めてでしたし、デジタル通信のTDMA方式には世界中の通信関係者が注目していたようです。

京都で開催されたIEEEの総会だったと思いますが、会場での車載地球局の展示実験には、居並ぶ世界の学者達も驚嘆したと聞いています。実は私達は留守番をしていたのですが、その折しも、あの宮城県沖地震(昭和53年6月12日)が発生したのです。仙台で衛星地球局の実験を行うため、榴ヶ岡電話局の屋上に、長径が15米もあるオフセットアンテナの取り付け工事

中であつたのです。地球局の構成を担当していた私は、当番を代わってもらい、特急列車(新幹線はまだ無い)に飛び乗って、6時間以上も立ちっぱなしで、停電で真っ暗闇の仙台に辿りつきました。回りの民家や学校、墓石までも倒壊が見られましたが、幸い建設中の実験設備には重大な被害は無く、ほっとしたことを思い出します。

話がちょっと戻りますが、通信実験の最初のアナログ信号にテレビ信号を伝送したのです。それが「孤島に築く」という16ミリの社内記録映画をVTR変換したものでした。これは昭和47年(1972年)5月の沖縄本土復帰に備えて、鹿児島と沖縄を結ぶ通信回線を確保するため、トカラ列島伝いにマイクロ無線回線を構築した時のものでした。悪石島という小さな島で、地元の献身的な協力を頂いて完成したお祝いに、お餅をついている光景でした。杵の上げ下ろしの送信と折り返し受信の時間差がはっきり見られ、3万5800キロの静止衛星と電波の速度を実感させられました。

テレビ中継回線の全国網化や電話の全国自動化を目指してきた私達には沖縄本土復帰は大きな節目でもあったのです。しかし、復帰後も南大東島や小笠原諸島ではテレビが見られなかったのです。そこでCSを使って電話やテレビを中継することには、大きな意義がありました。このための実験に、私達の関係した八丈島のVHF無線中継所跡を使ったのも思い出の一つです。

門前の小僧ながら参画できたCS実験が、20余年の歳月を経て放送大学の全国的エリア拡大につながり、私達の身近なものとして実現したこと新たな感動を覚えたのです。実は私の住んでいる処はビル陰のため、UHF地上波は受信状態が悪かったので、CSによる放送を待ち望んだ一人でもありました。

先日、放送大学の『大学の窓』で、八丈島での受講者紹介を見て懐かしくなり、改めて平成10年1月21日の特別番組のVTRを再生し、感動を新たにした次第です。

介護保険の実施を前に

齋藤 隆

秋とはいえ夏を思わせる日、ウイリング横浜へ向かう途中で久しぶりにT先生から声をかけられた。T先生は歯学部解剖学教室で研究に励んでおられる。ウイリング横浜は福祉保健研修交流センターの名称で、介護支援専門実務研修で何度か足を運んでいる。T先生の問いかけに、行き先を告げると関心を持たれたようであった。今回は、介護保険に関する情報を収集するために

ウイリング横浜に行くところで、十年来歯科の在宅診療を通じて在宅ケアに関心を持つようになり、あわせて介護支援専門員となったことなど、私自身のことを話し、間もなく別れた。

2000年4月1日の実施に向けて、介護保険への注目度は益々高まってきた。実際、新聞等のマスコミは連日のようにこの制度について取り上げ、また数多くの出版物も発行されている。

一方で、福祉サービスの規制緩和により、様々な民間企業のシルバービジネスへの参加が活発化してきた。厚生省の試算によると、2005年の高齢者市場規模は、8兆円近くにのぼる。この背景には、介護保険制度のめざすもののひとつに民間活力の活用があることが考えられる。福祉サービスに競争原理を導入し、より質の高いサービスを利用者に提供しようとするものである。民間企業の多様なサービスを選択することができるが、従来の与えられる福祉サービスと異なる点である。

けれども、利用者の選択の幅が介護保険導入によって広がるとはいえ、介護給付が限られ、今まで受けられていたサービスが受給できないケースも生じる。また、サービスの種類も包括的で無制限に利用できるものになるとは限らない。

介護保険制度は要介護者への様々な介護サービスによって、自立を促すことを目的としている。民間事業者の参入に対して、厚生省は「利潤追求というインセンティブで対人サービスの質が向上し、市場の活性化も期待される」と考えている。利潤を追求するため、事業者は要介護度の高い利用者を抱え、しかも症状が改善されても現状のままでサービスを提供し、自立を阻むことも心配される。いわゆるモラルハザードが起こることが懸念されるとの指摘もある。

こうした民間サービスに対しても、今までのように上から与えられた福祉サービスと同じだという利用者や行政サイドの声も聞こえてくる。従来の制度での介護サービスに満足している人達も少なくないのも事実で、その調整がなかなか難しいところだ。

医療に市場原理を導入したアメリカでは実際にモラルハザードが顕在化した。日本でも、それを警告する識者も数多くいる。福祉サービスに市場原理を導入すれば、福祉の商品化は当然起こってくる。

社会福祉基礎構造改革により福祉制度は大きな転換を迎えようとしている。そのキーワードが「措置から契約」である。我国の福祉事業は措置制度によって行われてきたため、福祉サービスの多様性、利用者の選択権に乏しいと

されてきた。そこで、給付と負担の関係を明確にし、利用者の選択により介護サービスを総合的に利用できるようにしようとするのが、介護保険制度の理念ともいわれている。

総務庁の高齢者意識調査によると、将来の日常生活に不安を感じると答えた人は63.6%であり、その理由として、要介護状態になることと答えた人が52%であったと公表した。

要介護者の数は、2025年には現在の倍近くの約520万人になると推測されている。これに対してサービスの担い手のマンパワーが不足するという危惧もある。

老後の最も不安な要因である介護を社会連帯によって支え合い、その老後の安心を得ることができる質の高い介護給付を、そしてさらに公平で誰もが納得できる給付と負担のバランスを築きあげていくことが、今後求められるのではないだろうか。

平成11年度神奈川学習センター

学生研修旅行 参加感想文

-ペリー来航と音楽-

去る10月19日に、神奈川学習センター恒例の学生研修旅行が、笠原潔先生(音楽学)指導のもとに行なわれた。『太平の眠りを覚ます』と謳われたペリー提督の率いる黒船艦隊には、一隊の少年鼓笛隊と二隊の軍楽隊が同行していた。彼らは、どのような音楽を演奏したのか。それに関しては、どのような史料が残されているのか。今回の研修旅行では、彼らの足跡を辿りながら、黒船来航時に行われた奏楽の様相について探究した。

まず、1853(嘉永6)年7月の第一回来航時のペリー上陸の舞台となった久里浜を訪れ、上陸地点を見定めるとともに「ペリー記念館」を見学した。さらに『浦賀文化センター』を訪問して、浦賀に来航した黒船に最初に乗り込んだ浦賀奉行所与力中島三郎助の事績を学んだ後、横須賀市自然・人文博物館で、ペリー来航時に作成された絵巻を拝観した。

最後に、1854(嘉永7)年2月のペリー第二回来航時の舞台となった横浜の情景を見ながら、幕末の横浜に鳴り響いた当時のアメリカのヒット・ナンバーの数々を楽しむことができた。

相馬 純子

ペリー提督の率いる黒船艦隊が1853年浦賀に来たことは歴史で学ぶが、その時一隊の少年鼓笛隊と二隊の軍楽隊が同行していた。しかも犬一匹も同行していたとは初めて知った。博物館の一般公開されていないという絵巻物に、上陸の様子が詳細に描かれていたことは驚きであった。しかも幕府側の整列した人物名まで記入されているとは考えてもみなかったことである。

ペリー提督の献上品には、モルルス信号機や蒸気機関車、炭水車、客車の模型なども描かれており、当時のアメリカの技術水準の高さを示すものであった。

音楽隊が演奏したという曲をテープで聞かせていただき、さらに驚いた。アメリカ国歌(プレジデントマーチ)、アルプス一万尺、主人は冷たい土の下、草競馬など現在の私達になじみの深い曲が演奏されていた。幕末の武士達がどのような思いでこのようなリズムカルな曲を聞いたのであろうか。

米艦水兵を埋葬したという横浜(現在の元町)の増徳院跡地を探り、絵に描かれている地形を確認すると共に、この水兵が埋葬された場所が外人墓地の始まりという、まさに現場を訪ねることの大切さを実感した。

渡辺 新一

「……上喜撰たつた四杯で夜も寝れず。」と広く伝えられていますように、1853年のペリー提督一行の黒船艦隊来訪は、近代日本の夜明をむかえる事件でありました。その一幕が久里浜の地に行なわれましたが、この研修旅行で音楽との関わりを訪ねながら、当時を偲ぶことが出来ました。浦賀、横須賀、横浜をめぐるの、笠原先生指導の研修旅行は、楽しい勉学の一日でありました。所長先生以下職員の皆さんのお世話に感謝を申し上げます。今回の研修旅行では、これ迄史跡だけに重点をおいて観ていたのが、音楽という新しい視点から見る事ができた事で、新たな発見を感じました。また絵巻物などから、当時の人々がどのような気持ちで新しい文化を受容したかを読み取ることができ、大変意義深かったと思います。

追記：その後、NHKニュースをみていましたら、当時の軍楽隊が演奏していた楽曲「ヘール・コロンビア」の欠損していた楽譜が補われ、横浜消防音楽隊によって演奏されたことが報道されていました。懐かしく研修の一日を思い出しました。

赤松 孝子

ペリー提督率いる黒船の来航は遠い遠い昔の話と常々思って居りましたが、たまたま山梨の田舎で先祖を調べて居りましたところ、嘉永5年という文字が戸籍謄本から読みとれました。この時代に我が祖先が鎌倉の裏街道ぞいに逃げて来て住みついたという説を村の年長者から聞いた事を思い出しました。ペリーの来航が何か身近なものに感じました。まず“現地に行け”と笠原先生がお話をしていらいっしやいましたが、その通りだと思いました。

外人墓地は横浜に行く度々訪れた場所でしたが、その由来などはわからずに居りました。ミシシッピの乗組員ローバート・ウィリアムの葬られた場所から始まって、現在の外人墓地となった話など知らずに、海の見える方ばかりを歩いていたのです。横浜村山下なる増徳院に葬りたる時のスケッチをみて、今の山下町を重ね合わせ、時の流れを思いました。大平の眠り覚ました黒船と、それ以降の日本の歴史をもう一度勉強してみたくくなりました。

鈴木 由子

歴史を勉強する際、注意しなければならぬことが何点かある。ある特定の人物を中心に置き、その事跡をたどることのみ片寄りすぎ、その人物を過大評価してしまうことがあるが、幕末史に関してもその傾向が強いように思われる。具体的にいえば薩長下級士族の過大評価と幕府側の政治・外交の過小評価である。今回の研修で中島清司・三郎助父子のような浦賀与力・同心、堀達之助のような通詞などの下級幕臣にスポットをあてるような勉強はとても大切だと思われた。

また今回のように、歴史を見る時、この時代の人とはどんな音楽を聞き、どんな歌を歌っていたのだろう、と考えるのも楽しいと思った。

吉野 美代子

1. コスモスを見に何度か訪れた久里浜がペリー提督一行の上陸の場であり、そこに海兵隊や水兵・軍楽隊・鼓笛隊数百名が降り立ったのだと聞く。海岸に立ってその狭さを体感でき、そのとき歌われたのが、いまも親しまれている「アルプス一万尺」であると知ったことは驚きであった。

2. 黒船に一番乗りした浦賀奉行所の与力中島三郎助が、その後数奇な軌跡をたどり、後に函館の五稜郭で戦死した、という個人の歴史も興味深かった。

3. 元町の君島ブティックの入っているビルがその昔増徳院であり、ペリー

の2回目の来航時に死亡したウィリアムが裏手の外人墓地に埋葬され、その資料を現場で確かめることができたことは有意義であった。

4. 横浜沖に停泊中のポウハタン号艦上で minstrel show が行われ、フォスターの「オ、オ、スザンナ」や「草競馬」が、白人によって黒人訛りの歌詞をつけられて「minstrel song」としてうたわれたことは、とくに興味深かった。

5. 横須賀人文博物館に於いて、ペリー来航時の絵巻物を比較して見ることができ、実際の色、人数、雰囲気までも感じとることができた。

大出 銅蔵

横須賀市は西暦2003年がペリー来航150年に当たるため記念行事を計画しており、わたくしたち「浦賀古文書研究会」並びに「浦賀歴史研究会」はペリー来航前後の資料収集、翻刻、解読などを行っています。そのような時に、去る二月には「ペリー来航と音楽」の面接授業が開設され、さらに今回現地への研修旅行が計画され、願ってもない好機と考え参加致しました。

特に「音楽」との関係からペリー来航を研究されたものはなく、わたくしたち郷土史研究仲間にとっては極めて興味深いものです。当時の現地浦賀の様子を伝える古文書は極めて少なく、浦賀では詳細なものは発見されていません。

浦賀にはそれ以前にも大型西洋帆船はしばしば来航して住人は見慣れ

ていましたが、蒸気船の出現は初めてであったため、驚きは大きかったようです。しかし、浦賀奉行に勤める与力・同心は風聞からアメリカ船の渡来を察知して、再三、浦賀奉行に問うており、一ヶ月余り前まで厳しい警固訓練をしていた記録が残されています。だが、ペリー上陸時に小笛隊と軍楽隊の演奏する中、一糸乱れぬ行動を集団でする様子を見た与力・同心の多くは、刀剣をもって一対一で戦うわが国の戦法ではとても勝目はないと悟ったと言われており、大船建造と洋式軍隊の必要性を痛感したのです。

おそらくその時に演奏された音楽も洋式軍隊には必要不可欠のものとして認識されたのではないのでしょうか、面接授業と研修旅行を通じて感じました。話は違いますが、敗戦後米軍の基地となった横須賀では米軍の慰安のために、専用のクラブでジャズが演奏され、日本のジャズ界に大きな影響を与えています。そして、最近では毎夏野外で盛大な演奏会が開かれています。

最後に副浦賀奉行と名乗り、交渉に当たった与力・中島三郎助は翌年の1854年、浦賀で日本最初の洋式帆船を建造しており、更に幕府が日本海軍創設のために開設した長崎海軍伝習所に派遣され、特に「軍艦製造を重点的に心得ること」の任務が課せられていたのです。それ故、ペリー艦隊との交渉のために乗船した中島三郎助が船の構造を詳しく検分したことがペリー側の印象を悪くしたことは頷けます。彼は造船技術者でもあったのです。



学生団体・ サークル・同窓会 のお知らせ

放送大学同窓会

放送大学神奈川学習センター同窓会は、同窓生でサークルを作ろう、という企画を二つ発足させました。

*グランドゴルフ

10月17日、第1回発会式を兼ねて大岡センターのグランドで実施しました。藤井会長の挨拶、ルール説明、練習の後ゲーム開始。最初のチャンピオンは黒瀧美代子さんでした。このグランドを拠点に今後、月1程度で活動をする予定です。興味のある方は、是非ご参加下さい。

問合せ先：金子和子

Tel・Fax：045-621-3387

*Shall we dance?

年2回小パーティを開催予定、それに備え不定期に練習します。

問合せ先：西浦久曼

Tel：045-781-4638

*****見学会のおしらせ*****

2000年1月29日(土)に海老名の泉橋酒造の見学会を実施します。

冬は熱燗が良いですね。

問合せ先：出口仁美

Tel・Fax：0467-24-0160

フォスターチャイルド訪問

同窓会はフォスタープランに参加し、現在4人のチャイルドを支援しています。その一人のソムチャイ君に会うのと、現地で我々の援助金がどのように使われているかを視察に行きます。現在6人の賛同が得られ、2000年2月9日～2月13日の6日間、タイの北東の町 Udonthani から更に奥地へとソムチャイ君の村を訪ねます。

フォスタープランに興味のある方は、1月下旬に学習センター談話室に活動内容を展示しますので是非ご覧下さい。

問合せ先：田澤誠一 Tel：0468-66-6050

E-mail:NBB02754@nifty.ne.jp

Nancy Class & “うえるかむ”

今年の1月で Nancy Class ができて4年半になります。一ヶ月に2度なので遅々とした歩みですが楽しく続けています。

“うえるかむ”は Nancy Class と殆ど同じメンバーでラジオ講座の「英会話入門」やインターネットから入る“Mag Mag”の英字新聞を読んだり、興味あるものを取り入れてオシャベリに花を咲かせています。

又、各支部合同行事では今年はタイ、台湾に続きいよいよイギリスの Open university を訪問予定です。小さな国際交流にあなたも参加なさいませんか。

*例会

“Nancy Class”

第二水曜 10：00～11：30

第四水曜 10：00～11：30

“うえるかむ”...神奈川...

第三木曜 13：30～15：30

第四水曜 13：30～15：30

*各支部合同...毎月一回程度

*サークル参加ご希望の方は下記へお問い合わせください。

星：045-844-9647

坂本：0467-31-8036 (19時以降)

人間学研究会

【例会予定】

1/9(日)討論「1900年代はどのような時代であったか」

2/13(日)卒業研究発表「単身者の高齢期生活」

3/18(土)～19(日)人間学研究会研修旅行で、放送大学本部のセミナーハウスに1泊します

1日目：久里浜～鋸山～本部セミナーハウス(泊)

2日目：国立歴史民族博物館見学を予定しています

4/9(日) 総会

【歩きましょう予定】

2000年元旦ウォーキング 1/1(祝)

JR上野駅公園口改札前に8:40AMにお集まり下さい。鏡開きがありますから、コップを持参して下さい

鎌倉初詣ウォーキング 1/8(土)
金沢文庫～六国峠～鎌倉宮～鶴ヶ岡八幡

東海道自然歩道を歩く 2/18～2/20(金～日)

藤枝～高根山～金剛院～春埜山頂～秋葉神社～熊

第11回おくのほそ道を歩く 3/24～3/26(金～日)

鏡石～須賀川～郡山～二本松～福島
連絡先：大出 鍋蔵 Tel:0468-41-7937

神奈川放友会

新年おめでとう御座います。

20世紀最後の新年を迎え学習モラスタスパートに入っていることと思います。

神奈川放友会は会員相互の交流の輪を広げて親睦を図り、学習を援助する学生団体で下記のサークル活動をしています。

- ・行楽と研修を兼ねた旅行
 - ・研修旅行(大学本部・図書館等)
 - ・旅にいこう会(行楽地・名所史跡等)

・学習に関する情報交換

・会員相互の研究発表

放送大学での学生生活をより一層充実させ交流の輪を広げたい方の入会をお待ちしています。

・行事予定(1月～3月)

2月20日(日)旅にいこう会

3月18日(土)例会(翌年度計画)

照会/入会申込 連絡先

〒235-0023 横浜市磯子区 1-15-1 810号

吉田 昭二

吉田万里子

Tel/Fax：045-752-2783

神奈川放友会の活動報告(その1)

村上 信子

神奈川放友会の大学本部研修旅行(9月11日～12日)に参加した。朝8時横浜駅集合、途中1人参加で計9人のグループで出発した。千葉の船橋にあるサッポロビール工場を見学したり、試飲会で好きなものを飲んだりして楽しんだ後、海浜幕張駅に到着。ここで自由行動になり、巨大な建造物の建ち並ぶ幕張メッセ周辺を、吉田さんに案内して頂く。

その後、シャープシアターを体験、見学してから大学本部まで歩いた。暑さの所為も有り、図書館に着いた時はやっと辿り着いたと云う思いで、ほっとした。

まず図書館のビデオ室で、ウルトラセブン・ウルトラQのビデオを見た。ずっと昔子供達と見たテレビ映画だったので、ただ懐かしがって見ていたら、それが今日の研修課題の一つであると言われ、面食らってしまった。それでも色々な意見が出て決着の付かないまま夜に持ち越した。夕方、セミナーハウスに入り、鍵を貰って自分の部屋に落ち着く。夕食は、外に出てステーキハウスで好きなものを食べる。満腹感を味わいながら、夜の町を彷徨い歩いて帰ってきた。シャワーを浴びた後、講義室で又、昼のビデオについて討論

会を始める。年代も20代から70代の年齢差があり、時代の違いは否めない。放友会のあり方と今後の見通し等から話題は、いろいろな方面に広がり、喧々囂々のディスカッションを繰り広げ、夜の更けるのも忘れた。矢張り人生経験の豊かな篠原さんや柴崎さんの話は、説得力があって、私達主婦だけの井戸端会議とは一寸違って面白くなるものばかりだった。部屋は冷房も利いて、テレビもラジオもあり勉強には快適だし寝心地も良く、ぐっすり眠れた。朝、散歩を兼ね、朝食の買い物に出かける。セブン・イレブンで、それぞれ自分の好みのもを買ってきて、食堂に持ち寄り、賑やかに喋りをしながら食べた。コンビニの食べ物も案外美味しいのに驚いた。

2日目の予定は、地球館や海ほたる等の見学があるが、女3人ともそれぞれ用事があり、海浜幕張駅で、皆と別れた。途中3人とも別々の行動となったが、10月19日の学習センターの研修旅行では、又、逢いましょうと約束して、メンバーとの絆を深められ、又自分も有意義な時を過ごせたと思う。お世話になりました。

神奈川放友会 活動報告(その2)

堀籠 悦子

「放友会・秋の勉強会」こう銘打った立派な案内状が届いた。バスによる横浜一日観光である。コースを見ると、何回か行ったことのある所が多い。中華街での昼食.....これは何度行っても楽しい。先輩・仲間との食事を楽しみに私は参加を決めた。

参加者は、吉田会長以下13名。笠井幹事のリードよろしきを得て、バスの二階席の一番前に全員落ち着いた。横浜駅東口9時出発、みなとみらい21地区、海岸通り、横浜ベイブリッジを車窓から眺め、スカイウォークでゆっくり散歩見学、三溪園へ。ここは美術愛好家として知られる実業家(生糸貿易)原三溪(本名・富太郎)によって、横浜市中区本牧に造られた広さ17.5万平方メートルの日本式庭園である。この庭園の特色は、四季折々の自然の景観の中に関西や鎌倉から集められた歴史的建造物(国指定重要文化財)等が巧みに配置されていることである。三溪記念館には、創設者・原三溪および三溪園に関する資料や美術工芸品が展示されている。これらを全部見るにはとても時間が足りず、今度一日かけてゆっくりと、それこそ梅の季節にでも来ようと思った。車窓から外人墓地を見、港の見える丘公園を散策、草木がとてもきれいだった。お腹のすいた私たちは、やっと中華街、重慶飯

店へ。次々と出される料理に「うーん、もうお腹いっぱい！」などと言いながら、結局全部平らげて、しばしの自由行動。関帝廟でお参りし、三国志の世界に少し浸り、ポーズをとって記念撮影。いつものピータンを買ってバスへ乗り込む。シーバスで港内遊覧し、ランドマークへ。展望台からの眺めは最高。そして驚いたのは、この展望料金(1000円)もバス料金に含まれていたことだ。割安企画だと幹事どのに感謝!

この後、バスで横浜駅東口に戻るのだが、放友会は一応ランドマークのレストランで、長谷川大先輩の音頭で、自己紹介や近況報告の楽しいひとときを過ごし散会した。

この観光で、色んな名所を見ることができたのは勿論よかったが、車内などでの交流が、私にはより強く印象に残った。バスでお隣の脇田さんとの健康談議は楽しく、しかも有意義であった。私は高脂血症を患っているが、食餌療法で治そうと思った。この会の良さは、色んな道を歩いて来られた先輩、仲間との出会いであり、共に放送大学で学ぶ人間として、お互いを尊重し、お互いを受け入れることにあるように思う。

「秋の勉強会」の楽しい波紋が会員全体に広がり、そして次回にはもっと多くの皆さんとの出会いが生まれることを祈りながら.....

放送大学神奈川合唱団活動状況

新入部員も少しずつ定着し、合唱部らしくなってきました。

練習は月2回、第一・第三水曜日を原則としていますが、会場の都合で変更されることもあります。

春と秋には、日頃の練習曲を持って、老人施設のデイケアセンターを訪問し、合唱を聞いていただいたり、一緒に歌ったり、ゲームを楽しんだりしています。

できれば、今度は、神奈川学習センターの学生の皆さんと「学歌」を歌う集いや、他の学習センターの皆さんとも、歌を通しての交流などできれば大変うれしいと思っています。

今までに練習した曲を紹介します。
野ばら 星の世界
白いなしの花 夏の思い出
荒城の月 思い出
花 いい声だ いい声だ
夢路より 旅愁
ふるさと いかで君と別れゆかん
ともしび 学生歌
峠のわが家 夢の世界を
一週間 諸人こぞりて

仰げば尊し ホワイトクリスマス
巢立ちの歌 学生時代
花の街 希望
アベマリア すずき
ラサ・サヤンゲ ほろほろと
ともしび 切手のないおくりもの
静かな湖 小さい秋みつけた
ねんねんねむれよ つぐみの子
希望のささやき 白ばらは雨にぬれ

放送大学学生募集

平成12年度第一学期

- ・出願受付：平成11年12月15日 ~平成12年2月15日
- ・授業開始：平成12年4月1日
- ・資料配布：平成11年11月15日から
- ・興味のある方・入学を希望する方には、入学手続きや授業内容を記しました募集要項と授業科目案内を無料でお送りします。はがき又は電話で、神奈川学習センターへ請求してください。

神奈川学習センターだより編集部

- 発行者：新飯田宏
- 編集者：五十嵐、遠藤、星、加藤、松本、皆川、吉田、斉藤、浅野、坂井
- ・Internetのホームページは、
<http://www.dango.ne.jp/ua-kanag/>
(近々、変更になります)
- ・Eメールの宛て先は、
social@u-air.ac.jp
- ・今回の表紙絵と中の絵は、前回に引き続き吉田万里子さんに描いていただきました。次回は、「卒業と入学」「花」について、特集をくむ予定です。学生の方の原稿を募集しております。
- ・神奈川学習センターの増築工事は着々と進んでいます。けれども、単位認定試験ではご迷惑をお掛けすることになると思います。学生の方々のご協力をお願いいたします。
- ・キャンパス・ネットワークのID番号とパスワードを、学習センター窓口で配っています。学習センターでインターネットと電子メールを行うことができます。